

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

伝道

――マルコ伝第6章1～13節――

1964年10月4日

小池辰雄

遂に彼に躓いた 二段の躓き 躓きの石 自分の長所に躓く 律法の根本精神 彼はいつも無
者 極限の点 第二段の突破 自己義認をすつ飛ばす 靈灯万里 無の点 天国体 無銭旅行
自分をキリストの懷の中に投げ捨てる 伝道は大失敗 第二の躓きの石を突破

【マルコ6:1～13】

「斯て其処をいで、己が郷に到り給いしに、弟子たちも從えり。²安息日になりて、会堂にて教え始め給いしに、聞きたる多くのもの驚きて言う『この人は此等のことを何処より得しぞ、此の人の授けられたる智慧は何ぞ、その手にて為す斯のごとき能力あるわざは何ぞ。』³此の人は木匠にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、その姉妹も此処に我らと共にあるに非ずや」遂に彼に躓けり。⁴イエス彼らに言いたもう『預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』⁵彼処にては、何の能力ある業をも行い給うこと能わず、ただ少数の病める者に、手をおきて医し給いしのみ。⁶彼らの信仰なきを怪しみ給えり。

斯て村々を歴巡りて教え給う。⁷また十二弟子を召し、二人ずつ遣しはじめ、穢れし靈を制する權威を与え、⁸かつ旅のために、杖一つの他は、何をも持たず、糧も囊も帶の中に錢をも持たず、⁹ただ草鞋ばかりをはきて、二つの下衣をも著ざること命じ給えり。¹⁰斯て言いたもう『何処にても人の家に入らば、その地を去るまで其処に留まれ。¹¹何処にても汝らを受けず、汝らに聴かずば、其処を出づるとき、証のために足の裏の塵を払え』¹²ここに弟子たち出で往きて、悔改むべきことを宣伝え、¹³多くの悪鬼を逐いだし、多くの病める者に油をぬりて医せり。

●遂に彼に躓いた

ここはマタイ伝でいいますと13章53節から58節、ルカ伝の4章16節、22節から24節です。ルカ伝は非常に断片的なものです。マルコとマタイはかなり並行した記事です。ルカ伝だと、これは伝道の大体、始めの方であり、マルコ伝は伝道のちょうど最中、マタイ伝だと、少



し後期の方に属するところに、出ているようです。

1 斯^{そこ}て其^{そこ}処^{ところ}をいで、己^{おのれ}が郷^{さと}に到^{いた}り給^{たま}いしに、弟子^{だうし}たちも従^{したが}えり。
ナザレですね。

2 安息日になりて、会堂^{かいどう}にて教え始め給^{たま}いしに、聞きたる多くのもの驚^{おどろ}きて言う『この人は此^{これ}等^らのことを何^{いず}処^{ところ}より得^えしぞ、此^この人の授^{おづか}けられたる智慧^{ちゐ}は何^{いず}ぞ、その手にて為^なす斯^{かく}のごとき能力^{ちから}あるわざは何^{いず}ぞ。3 此^この人は木匠^{たくり}にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟^{けいだい}ならずや、その姉妹^{あねいも}も此^{ここ}処^{ところ}に我^{われ}らと共にあるに非^{あら}ずや』遂^つに彼^{かれ}に躓^{つまず}けり。

私たちがここで注目しなければならぬ言葉は、

「遂^つに彼^{かれ}に躓^{つまず}いた」

という言葉です。マタイ伝11章のところに

「イエス十二弟子^{じふにだうし}に命^{いのち}じ終^はえてのち、町々^{まちまち}にて教え、かつ宣^{のべ}伝^{つた}えんとて、此^こ処^{ところ}を去^さり給^{たま}えり。2 ヨハネ牢^{ろう}舎^やにてキリストの御^み業^{わざ}をきき、弟子^{だうし}たちを遣^{つか}して、洗^{あら}礼^{らい}のヨハネが自^{みづか}分の弟子^{だうし}たちをつかわして、

3 イエスに言^いわしむ『来^{きた}るべき者は汝^{きみ}なるか、或^{ある}は他^{ほか}に待^{まち}つべきか』

ヨハネ伝の始めの方では、あれほど確信をもつてイエスを指し示した洗^{あら}礼^{らい}のヨハネでしたが、どうも、ここではヨハネも少しぐらついたとみえまして、「他^{ほか}に待^{まち}つべきか」と言う。

「あなたが本当の期待したひとでしょうか、どうでしょうか」
てなわけです。

4 答^{こた}えて言^いいたもう『ゆきて、汝^{きみ}らが見^み聞^{きこ}する所^{ところ}をヨハネに告^つげよ。5 盲^め人は見^み、跛^{あしなへ}者はあゆみ、癩^{しかみ}病人^{びやうじん}は潔^{きよ}められ、聾^{みみしい}者はきき、死人^{しにん}は甦^{よみが}えらせられ、貧^みしき者は福音^{ふくいん}を聞^{きこ}かせらる。6 おおよそ私に躓^{つまず}かぬ者は幸^{さい}福^{ふく}なり』(マタイ11・

1～6)

ここでも、

「躓^{つまず}かぬ者は幸^{さい}福^{ふく}なり」

とある。「躓^{つまず}き」という字は、ギリシャ語では「スカンダロン」という。英語の「スキャンダル」という字の元の字です。

●二段の躓^{つまず}き

福音^{ふくいん}というものは、私たち生まれつきの人間には躓^{つまず}きなんです。キリスト教に入^いることが、まず第一に躓^{つまず}きである。私も学生時代に、まだ中学校の上級生の頃ですが、

「耶^や蘇^そ教^{きょう}は……」

なんて言^いって、もう食^くわす嫌^{きら}いで初^はめから躓^{つまず}いているわけです。

多くの日本人がこの福音^{ふくいん}に、キリスト教に躓^{つまず}いている。また、キリスト教に入りましても、



さて本当にイエスの福音を、本当に使徒たちが受けとっていた福音を、これを受けているだろうか。このことにおいてまた躓いている。そこで、躓きが二段階に――まあ、それは何段階もあるでしょうけれども――大きく言って、キリスト教そのものに躓いていることと、それから今度は――「本当の」と言ってはおかしいけれども――一番生のイエスとまた使徒たちの福音の本質とその現実なまに躓く。これを乗り越えたら、今度は楽になる。その二段の躓きが、どうも福音においてあるように思われます。

イエスは故里にやって来た。キリストの一番身内の人たちは――もう小さい時からイエスを知っているご連中です――そこでもって、彼らは躓いてしまった。イエスがこの頃すっかり変わってしまった。何か、だいぶ不思議な言葉を発するし、また不思議なことをなさるし、「二体、あれは大工であるのに、お父さんは大工で、大工の仕事を受け継いでいるのに、何だかこの頃はだいぶおかしい」

と。しかし、彼らは内心、本当に驚いているわけです。

「多くの者驚きて言う」

とある。正に驚嘆すべき世界です。驚嘆すべき世界に驚いたことは結構なんです。驚いて、ただ普通は怪しんでいる。怪しみ、疑い、そして終いには、背いてしまう。これが躓きです。驚嘆することはいいんですが、その先は躓いてしまう。これは躓きの経路です。

●躓きの石

4 イエス彼らに言いたもう『預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外ほかにて尊ほばれざる事なし』

自分の郷、親族、おのが家では尊ばれないという。ちよつとそれに似た諺ことわざがあつたらしい。昔から預言者というものはそういうものだ。

私は預言者でも何でもないけれども、やはり、私の身内や親族というものは、なかなか私を分かつてくれない。子どもなんかは、セリフはよく覚えますけれども、しかし、なかなかそこへは入って来ない。一種の尊敬の気持も多少はあるようですけれども、しかし、なかなかそこへは入って来ない。親戚も同じこと。

私の兄がそうであつたんで、彼の聖書の扉に、

「私の家族や親戚の中に救われる者が、どうか私一人でないように」

と、その祈りの文句が書いてありました。私は兄が死んでから、それを発見したわけですが。私の兄は27歳で亡くなつてしまいましたけれども、終りの数年というものは実にめざましい信仰の生活をひたむきに辿つておりました。今、私は、もう何十年前のその兄が、実は非常に逆に親しくなった。やはり我々はみんな兄に躓いていた。一粒の麦が地に落ちて、初めてこちらが目が醒めたというような、誠にこれが福音の躓いの法則であるかもしれない。



神の子、キリストですらも実に躓かれてしまって、いや、キリストであったからこそ、またよいよ躓かれたというわけでありましょう。早い話が、今、イエス・キリストがこの東京に現れたら、大体、躓かれてしまう。第一、クリスチャンに躓かれてしまう。正統なキリスト教と自ら自認しているような、また、聖書学者だとか、いろんな偉い先生方とか、そういうのに躓かれて、結局、最後はまた十字架ということになるでしょう。それなのに、「キリスト教、キリスト教」といつて騒がれている。なんという悲劇であるか、喜劇であるか。全くおかしいことであると思います。

そのような「躓きの石」という言葉は、既に預言者イザヤが言っているのであって、イザヤ書8章をご覧になると、

「¹³なんじらはただ万軍のエホバを聖としてこれを畏みこれを恐るべし。¹⁴然らばエホバはきよき避所となりたまわん。然どイスラエルの両の家には躓く石となり妨ぐる磐となり。エルサレムの民には網罟となり機檻となり。」
(イザヤ8・13～14)

「聖にして救いなる神が躓く石となり、妨ぐる磐とならん」と、イザヤが既に言っている。アモス、ホゼア、ミカ、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤ、第三イザヤ、その他、預言者たちはみな、その当時の人たちに躓きの石であった。同じく、イザヤ書28章のところを見ますと、

「¹⁶このゆえに神エホバかくいい給う、視よわれシオンに一つの石をすえてその基となせり。これは試みをへたる石とうとき隅石かたくすえたる石なり。これに依頼むものはあわつることなし。」(イザヤ28・16)

これに依頼むものはあわてることがない。しかし、これに依頼まなければ、この石に躓くという。キリストはその躓きの隅の首石であった。

●自分の長所に躓く

もう一つ、大事なところを引用しなければなりません、ローマ書9章27節からイザヤのことが書いてありまして、30節から、

「³⁰然らば何をか言わん、義を追求めざりし異邦人は義を得たり、即ち信仰による義なり。³¹イスラエルは義の律法を追求めたれど、その律法に到らざりき。³²何の故か、かれらは信仰によらず、行為によりて追求めたる故なり。彼らは躓く石に躓きたり。³³録して『視よ、われ躓く石、礙ぐる岩をシオンに置く、之に依頼む者は辱しめられじ』とあるが如し。」(ロマ9・30～33)

さすがに、パウロは非常に突くところを突いて語っているわけです。ユダヤ人というのは行為的な民なんです。非常に実践的な民です。

「私たちは永遠の生命を受けるためには何を為したらよいか」



と。

「何を為すべきか」

とユダヤ人は問う。

「世界は何であるか」

と知的に問うのはギリシヤ人です。

「人生は何か」

と言つて知的に問う。ギリシヤ人でも、ソクラテスあたりになると、それがすっかり内面的、行為的な世界に入つてきます。それでもなお知的な角度はずいぶん強いわけです。ところが、ユダヤ人は行為的な民ですから。モーセに神さまは律法を与えた。

「これを行えば生きる。これを実行すれば死なない。お前たちは永遠にわが民である」

という論^{さう}しです。それを正直に受けて、そして実行できると事実そう信じ、今でももちろんそうです。いいんですよ、それはね。非常にユダヤ人は行為的であるという特色を、長所をもっている。ところが、人間というものは、自分の美点、長所に躓^{つま}くんです。それで、一生懸命で行為を厳格にやつていく。神さまの前に忠実なる生活をする。そして、律法を喜んでゐる。詩篇にあるとおりに、

「昼も夜もこれを思い、これを喜ぶ」

という。しかし、律法を喜ぶというけれども、その律法というものの掴^{つか}み方に問題がある。とにかく、しかし、立派なんだな。だから普通、非常に倫理的な人、行為的な人は、ある意味においてなかなか福音に入りにくいんです。私の母なんかも、どちらかと言うと、そういう角度の人格でしたから、

「精神一倒、何事か成らざらん」

という論語の教えでもつて、昔の志を立てて実践していく型の母でありました。立派なんです、それは正直。でたらめではないんですから。

パウロがそうだった。彼はパリサイ人、即ち律法を拳々服膺して、立派な宗教生活をやっている。また、知的にもなかなかよく律法を窮めている。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と、彼自身が別なところで言っている。律法の義については——律法を踏み行ふという義です——そういった義については、自分は非難されるところがないと自ら任じていた。

キリストを信ずる者は、神によつて生きる者は、何か男らしくないというわけです。信仰だとか、信頼だとか、なんだかそれは女々しい。もつと自分というものをしっかり立てて、勇ましくやつていかなくてはと、元気のいいのはみんなそう思うわけです。また、自由思想家でもみな、

「何かに頼るのは前提があるからおもしろくない」



と思う。自分で自由に考え、自由に行動していくというのが、人間なら誰でも或る意味において、そういったものがあるわけですね。だから、

「一切を神に任せろ」

というのは、何だかちよつとあまり虫がよすぎて見えたり、あるいは、意気地がないように考えたりする。だから、この福音に躓くわけです。

●律法の根本精神

今、パウロが言っているように、ユダヤ人は信仰によらないで、行為によつて追求していた。だから、実は本当の律法に躓いていた。パウロが

「律法は聖なるものにして、そしてこれは神の意志である」

と言った。律法の律法たる本当の根本精神をつかまないと、律法というものを一つの対象にして、これを一生懸命にやるということが、いわゆる「律法の義」ということになる。

本来は律法は、神さまの生きた意志の表現としてそこに表れている。その律法に従うということは、決して或る一つの決まった命題に従うのではない。律法の根本の精神は、その時その時、毎日毎日、その人に神さまが命ずることは、その根本精神から具体的に自由に命じてくるわけです。そして、それを本当に喜んで、律法の根本精神に、神の意志というものをそこで受けとりながらいくならば、それは律法を本当に生かすんです。そういった生き方ができたのは、イエス・キリストの他にいない。そこで、律法に躓く。

律法は、「すべし、すべからず」の奥に、申し上げているとおり、

「お前はできるぞ。そんなことはしない」

と言って、神さまの方から私たちに信頼して、信愛してかかっている言葉がその奥にある。それが律法の本当の律法たるゆえんであると、私はそう信じます。そうでなかったら、

「律法を喜ぶ」

ということとは出てこない。

それにもかかわらず、人間はそれを受けとりきれないというところに、人間の情けなさがあるわけです。お父さんやお母さんに信頼されている子どもでありながら、なかなかその子どもが言うことを聞かない。現実の我々はもちろん、いろんな時代のズレがあったり、人間的な欠陥があったりして、そううまくはいきませんけれども。しかし、そういった残念な面があるわけです。

●彼はいつも無者

ユダヤ人は即ち、自分の行為的な力、行為的な実行力に頼って、そして逆に律法に躓いた。ギリシャ人は自分の智慧に頼って、そして今度はやはり福音に躓いている。また、日本人はかなり情感的な国民ですが、その情感的なものも非常に美しい大事なものがある。そ



の情感の民がまたそれで、その特色において躓きを犯す。こういうわけで、躓くというわけです。

結局、人間の生まれつきもつているところのいわゆる相対的な良きもの、それが丸であろうと、四角であろうと、三角であろうと、その相対的な良きものを一遍全部、御破算にしないではいかん。これはみんな神さまに、キリストの中にお返しする。それができないわけです。それが惜しくてしょうがない。自分の良いもの、大事なものです。それが或いは知識であろうと、体力であろうと、意志であろうと、何であろうと。とにかく、

「あなた方の今いただいている才能というものを、長所というものを、良きものを返せ」

と言う。

「せつかくいただいたものを返すんですか。これを自分で自由にのぼして悪いんですか」

なんて。だから、福音に躓くわけです。

ところが、イエスという人をご覧になると、いつも申し上げているとおり、ある青年が

「善き先生」

と言ったら、イエスは、

「なぜ、私のことを善いと言うか」

と。彼は善い人なんです、善人ですよ、イエスは。しかし、

「なぜ、私を善いと言うか。神さまの他に善いものはない」

「私は何もできない。何も教えられない」

と。彼はいつも無者である。自分は無き者の如きものである。自分は何ものでもない。これがイエスの根本的な自覚です。

● 極限の点

宮本武蔵が剣道を修行して、愚堂和尚という禅の坊さんに、禅の道を探ねるが、なかなかこの坊さんが教えてくれない。癪しやくにさわって、もういい加減で、さじをなげようとした。そうしたらば、宮本武蔵の立っている回りに、その愚堂和尚は円を書いた。そして、何も言わないで行ってしまった。宮本武蔵は円の真ん中に立たされる。

「これが見える者は見ろ、これを受けとる者は受けとれ」
という世界です。

これは福音に非常に通じている。円の半径は無限にのぼすことができる。この円は即ち或るひとつの無限な、無限にして完全なるものを表している——いつか「宗教と文化」という題で別な角度からお話しました——また、この半径を縮めていくと、ついに点になる。一点になる。円の中心になる。即ち、この円の中心のこの点と——半径の極限は点です——



―そうすると、また無限の広さに拡大することのできる円と、この一点と円とは相即する。いくつ円を書いて、これはみな相似形です。大小の差こそあれ、円はみな円である。そういう点と、それから無限の広がりとは即している。即ち、自分を本当の点とせよと。幅もなにもないところの一点とする。

点は天に通ずる。そうすると、天空の如く大きなものがこの中にある。これが「芥種一粒」なんです。「我、我」というその我を極限の点にせよという。キリストはその我を極限の点にしたんです。何ものでもない。点は見えないですよ、極限は。もしそこに何か長さがあつたら、まだそこは点でない。これは考えられない世界です。現実には考えられないところのものが点なんです。そうすると、現実にはそれは、極限は無に等しい。だけれども、それは驚くべき円の中心である。即ち、これが仏教的に言うならば、宇宙霊の「梵^{ぼん}」と「我」が一如の、梵我一如の境地なんです。この梵我一如という―ウパニシャットに出てきますが―この事態は実は福音の世界でキリストがちゃんとやっていらつしやる。

「我と父とは一つなり」（ヨハネ10・30）

と。キリストにとっては「梵」は「父」です。

「父と我とは一つなり」

と。即ち、その我というのがなぜ一つであるかという、自分を無者としたときに、無限となる。そのときに、相対的な我なんていうものを、

「私は三角だ。私は四角だ。私は丸だ」

なんて言つて、力^{りき}んでいるのはみんなダメです。この円も、この四角も、この三角もみんなこれは点にならなければダメなんです。三角の極限も、四角の極限も、円の極限も、これは点にならなければダメです。この三角をどんな相似形にして小さくしてごらん。最後には点になる。四角にしたつて同じこと。これはみんな点になる。

だから、申し上げているとおり、皆さんはどういうような才能がありましても、どういふ生まれつきでありましても、それを極限にすれば、皆さんは同じひとつの点になる。我々は、世界に何億の人がいても―彼らのその特殊性はみんなある。いいですよ、特殊性は悪くはないけれども―その特殊性の奥に、この点を持っているか持っていないかが問題なんです。点において自分の特殊性というものを自覚しているかどうかが問題です。ここに来なければ。

「福音書のイエスをよくご覧なさい」

と言うのがそのことなんです。ところが、そこをみんなは見ない。

『我、何事も為しあたわず』なんて、キリストは謙遜していらつしやる」

なんて、何を言っているか。謙遜どころではない。あれは本当の言葉です。いわゆる謙遜だとか何とか、そんなものはこの福音の世界では―道德の世界ではいいですよ、謙遜も―けれども、謙遜の一番極点です、福音の世界の謙遜というのは。もう何もありません。



平伏している。

「土に汝の口をつけよ」

と、旧約聖書のエレミヤ哀歌の中にある。そういうように、完全に自分が点になる。点になつてしまつたらば、実はそれは梵と一如の世界に入る。

「無」

という字はもともと、

「天蓋てんがいの下にの甘にじゅう、甘の林」

という字です。四十の林の木は無数だという。

そうしたら、神さまはキリストの中で完全にキリストを占領して、そして、彼は驚くべき言葉を発し、驚くべき業を為すに至る。この芥種一粒となつたキリストは——福音書でみんな驚嘆して、もう次元の相違です、絶対次元ですから——この絶対次元の中に入つてしまつてゐる。

●第二段の突破

パウロは自分が一生懸命でやつてゐる。それは健気けなげですよ、悪くはない。一生懸命で道徳的に、宗教的にやる。悪くはないですよ。でたらめよりかよつていい。けれども、それは御苦労さんな話です。そして、キリストを信ずる者を迫害した。使徒行伝9章にあるとおりです。

「サウロ、サウロ、なんぞ、我を迫害するか」

と。太陽の光よりか凄光が射してきて、サウロ（後のパウロ）は撃たれてしまつた。使徒行伝9章、22章、26章をご覧なさい。これが即ち、彼が己の義を完全にぶち破られて、

「俺はとんでもない間違いをしていた。ただ、主さまだけだ。イエスの十字架は、

この自分を義とする自己義認をすつとばしてしまつた。『偽善なる学者、パリサイ人よ』とキリストが烈しく言われたところの偽善なる学者・パリサイ人の一人で

自分はあつた。」

と、完全に降参して、

「わが目より鱗うろこの如きもの落ちたり」（使徒行伝9・18）

と。開眼したんです。これは躓きの石にもの凄く躓いていたパウロが、とうとうダマスコ途上でひっくり返されて、そして、彼は本当にイエスの僕となつた。この突破をしなければ——これが本当の福音の第二段の突破なんです。ところが、普通のクリスチャンはこれをやつてない。パウロ的なこの展開を。

私も無教会にいた時にはもちろん、それで間違つたとは思わない。けれども、どうしても、或る壁から先が、或る層から先が進めない。一般の教会でも、無教会でも——私は

「誰がどうだ、彼がどうだ」



なんていうことを言っているのではない——大体において、その所までは来てはおりまされども。神学の勉強も、聖書の研究も、社会的な慈善も、みんな結構ですよ。何も私はそれを悪口言っているのではない。

けれども、そのもう一つ先のところに、どうして入らないか。そこへ入った人に今度は躓いている。私は、人間小池はいくら非難されたって、決して抗弁はしません。けれども、今私が捕まえられている、我々が捕まえられているこの世界は、誰が何と言おうとも——私はパウロさんやペテロさんの世界に入ったから、人間は小さくあっても、ガタガタでありまして、この中にその世界が入ってきたから——どんな偉い学者が、どんな神学者が、どんな先生方が、どんな先輩が、私を何と言おうとも、これはびくともしない。これは一歩も退くわけにはいかない。それは第二の躓きの石を私は突破させられたから。それが即ち、聖霊のことなんです。

●自己義認をすつ飛ばす

キリスト教会は、どこへ行ったら、カトリックだって、プロテスタントだって、みんな十字架が立っています。皆さんは何を見ているか。十字架を見ている。それは結構です。何も、十字架を悪いとは言わない。けれども、本当にキリストの霊の十字架を、今もなお私たちのために、二千年前に架かったこの十字架は、現実として私たちの全存在の贖いです。己を義とする、自分を何ものかと思っていること、それが罪なんです。その何ものかと思つて、点になれないところが罪なんです。幅もなければ、長さもなければ、何もないところの、この点にならなければ。一点に。芥種一粒の一粒になれない。それが罪です。キリストは、そのように私を、皆さんを、自己義認をすつ飛ばしてしまった。

人間は生まれつき自己弁護者である。

「己を憎まずば、わが弟子となることができない」

とは、キリストの言葉です。

「自分をも憎まなければ、本当に私の弟子にはなれない」

と。ところが、人間はみんな、自愛という根本衝動がある。どうにもならん。だから、普通の文化人や普通の人に嫌がられるんですよ。

「自分をも憎まなければなんて、そんなことができるか」

と。できませんよ、これは。できないから、キリストは十字架に架かったんです。その十字架を本当に見上げて、パウロと共に、

「我、キリストと共に十字架されたり」

となったならば、もう、生まれつきの自分なんていうものはどこかへすつ飛んでいつてしまふ。学問も、修養も、道徳も、芸術も、事業も、みんなこれは自己充実の、自己発展の道なんです。それは悪くはない。悪くはないけれども、その自己というやつが、絶対化さ



れているところが悪いんです。それが絶対なる神との交わりが切れているから――「レリギオン」(宗教)と言うのは「結合」という字だからね――霊合してない。そして、ここを切っておいて、こいつ(自分)をいくら拡大したって、これはダメです。それは滅びる。その文化は滅びる。

●霊灯万里

この一点に結ばばいい。太陽の光も焦点を結べば、そこに光を発する。レンズで光が集まると、焦点を結ぶと、太陽の光がここで光熱を発する。私たちは小さいときから、虫メガネでよくやって知っている。

オリンピックの聖火というのは、アテネで太陽の光をそういうように焦点を結ばせて、そこに発したところの炎です。あれはお天道の光がああ炎になっている。だから、聖火というんです。そして、私の歌みたい「霊灯万里」の如く、今、万里を走っている。あれは非常に我々に関係がある。聖火は霊灯万里に走っている。ただ、あのオリンピックの場合は、太陽の光です。この地上の生きとし生けるものをみな生かしているところの驚くべき太陽の光熱です。もし、お天道さんがどこかへ行ってしまったら、これは万事お終いですよ。太陽の光はそれほど素晴らしい。それを集めて炎にしたというのは、正に素晴らしい着想です。結構なことですよ。

けれども、この自然界の一切を支配したもうところの、霊なる神のこの霊灯を、さっき言ったこの一点に焦点させないからいかん。この一点に焦点させて、霊灯を焦点させて、ここに光が、

「この霊灯がともったら、もはや、何をか要せん」

とキリストが言われたことです。この焦点を結ぶことにみんな躓いている。これが第二の躓きなんです。

●無の点

私は今度は、12月15日にはつきり言うよ。どうか、キリスト教界のいろんな人に聞きてもらいたい。なかなか来ませんけれどもね。初めから躓いているから。「小池辰雄」なんていう名前を聞くと、「あれは」なんて。もう私の名前に躓いている。

そういう霊灯がここに灯る。即ち、私たちに、この一点に焦点を結ばせ、キリストの御霊がここに灯るために、キリストは十字架されまして、ここにちゃんとそういう無の点を、無というその点をつくってください。

「お前の中心はもうすっかり自我からはずれている」

と。自我からはずれている。仏教的にはもう、梵我の状態に入ろうとしている。そこに聖霊が臨んでくる。



「祈りてあれ。さらば、聖霊が汝らに臨む。その時、本当の力を得るぞ」

という。これが使徒行伝の始めであり、キリスト教の歴史はそこから始まっているんです。キリスト教の歴史はこの焦点から始まっているのに、それを忘れて、なんだかんだと躓いている。「聖書研究会」なんて御苦労さんな話です。私だって聖書を研究しますよ。そんなものはみんな第二義的なことです。第一義は、自分自身がこの焦点とされて――聖書が語られているところの現実の奥はみなそこから発している行動であり言葉であるから――そうしたら、楽に読めてくる。もう本当に楽に読めてくる。もうそうになったら、もの凄く広くなる。広く深くなる。何を讀みましても、何を学んでも、何を聞いても、そこから本当のものをみな掴んでくることができる。太陽の光よりも素晴らしい霊光が私たちのこの心眼から発して来ますから、それが見えてくる。だから、その人は、もともと四角の人だったら、その四角はもの凄い四角となる。四角において普遍的なものが現れる。三角において、丸において、これはみな同じ焦点を、共通なものをもっているから、そこで、決して類型でなくして、しかもみな特殊性をもちながら、それが偉大なハーモニーとなる。偉大な有機体となる。大自然のごとし。大自然はみな太陽の光を受けてさまざまな、そこに柳があるかと思えば、杉があつたり、桔梗ききようがあつたり、女郎花おみなえしがあつたりする。さまざまなものがみな大自然の調和をなして、自然の美を、コスモスをなしていく。本当のコスモス(宇宙)とはそのことです。

●天国体

人々はこれに躓いて、それで、イエスに躓いてしまった。もう当然ですよ。躓かなかつたら、おかしいくらいなものです。躓くのが当然です。躓かなかつたら、或いは偽りかもしれない。それくらいに躓く。

私たちがその世界に入ると、ある人々は

「あれはおかしい」

と言う。何がおかしいか。何もおかしくはない。私はそこに行ってお話すれば、小池というものを外から聞いているとおかしいけれども、本当に会って直々に話を聴いてみたら、

「どうにもならん。その通りだ。その世界は本当にそうだ」

とうたれるわけです。今度は祈りの世界でやると――第三の躓きと言つていいかもしれないね――祈りの世界でまた躓いてしまう。それはその祈りが体裁だから。やっぱり、それが同じことなんです、その躓きは。結局、祈りの世界で御霊を自分が受けるまでは、躓いてしまう。

でも、こわがることはないですよ。その世界に入つてごらん。そうしたらもう、おそ懼れなき世界に入る。マリアだって、はじめは躓いてしまったんだから。そうしたら、聖霊が

「おそ懼るな」



と言った。いつも、人間は低い次元にいと、その高い次元のことが何かこわい。ちつとも恐いことはない。本当の平安と喜びと生命と、一切のものがそこから来る。実は、それがなければ、みんな何かおかしいんです。実は自分たちが、どこか行き詰まっている。本当の晴々としたものがない。何かどこかに雲がかかっていたりする。ちょうど、ジェット機がそうでしょ。ジェット機の下の世界は、晴れたかと思えばまた雲がきたり。ところが、ジェット機は雲の上に出てしまえば、いつも晴れているんだ。一万メートル以上のところを飛んでごらんさい。全然、静かだから。もう真つ青なんだ。

そういうように、本当に霊的な太陽を受けとっている人は――自然界の太陽はいろいろ雲で塞が^{ふさ}れているけれども――霊界の太陽キリストの、神さまのみ光を御霊において受けとっていると、御霊のみ光を受けとっていると、もうここが曇つていようが曇つていまいが、自分の回りの世界が、環境が、運命がどういようにいきましても、霊界の太陽からのみ光が回りの霧を払つていく。これですよ。こういう現実が信仰の現実です。

ここに来たらもう、病気になりましようが、悲しいことが起きましようが、生活がどうもおかしくなろうが、この生命、この力です。これが即ち、天国体ということ。自らが即ち天国、パラダイスになつてゐる。そうならなかったら、つまらんです、信仰なんて言つたつて。絶対界がここにひとつの焦点を結んで、そして光を発してくる事態にならなくては。人にはその光が見えようが見えまいが、ちゃんとある。もうこうなつたら、どうなつてもびくともしない。人間ですから、波は立つでしょう。けれども、波が立つても、奥の世界は波が立たない。それを持つてゐる。これは絶対にキリストの御霊を宿しているから。

「御霊を宿さざる者はキリストチャンでない」

とパウロが言つた。「キリストチャン」という言葉が、何かキリストのいわゆる奴隷みたいで、何か考えが非常にキリスト教的な考えになつてしまつて、自由にこの文化世界でものを受けとつていくことができないように普通は思つてゐる。とんでもない。一番、色のない、一番自由な、そして一番正しい豊かなものの見かた、把握が、このキリストの無色透明のみ光をいただく――太陽の光が無色透明のごとく、色がない――一切の色や形が逆に見えるてくる。それを

「信仰に入ると、何か非常に狭くなつておかしくなる」

なんて思う。それはそういう本当の世界に入つてないキリストチャンがいくらでもいるものだから、そんなサンプルでもつて言うからです。

それはいかんですよ。自分で本当にやつてみなくては。私は正直もう、楽でしようがない。なんとありがたいことか。変な――「変な」なんて言つてはいけなけれども――いろんなレットル・クリスチャンなんかとお話するよりか、普通の虚心坦懐な人とお話する方がずつと私は通じます。けれども、その人たちに、

「もう一つこの世界が分かつてくれるといいなあ」



と思うんです。そのところに来ると、もうどうにもならん。

そのところに来ると、お釈迦さんの世界で素晴らしい世界に入っている坊さんたちの言ったりすることがよく掴^{つか}めてくる。本当にその通りだと。昔の坊さんたちは偉かった。仏さんの世界でその世界に入っていたから。ただ、こちらは、悟りではなくて、驚くべき神の、創造的な神さまのものの凄い内容をもった世界ですから、仏教の世界も全部——マホメット教であろうと何であろうと、およそ真なるものはみんな——これを受けとっていくことができる^と申し上げているわけです。これはこの蹟^{あと}を乗り越えようと、もう全然、蹟かざるところの世界に入る。何としても、この福音を、あなた方は身をもつて証しなくてはダメです。パウロも、

「やむをえざるなり。福音を宣べ伝えずば災いなるかな」

と言うわけです。そうしたら、皆さんのなさることは本当に自由に、しかも創造的に展開していく。いわゆる自己中心でなくなっているから。そして、本当にその人らしさがぐんぐん出て、しかもこだわらないという、もう説明のつかない世界に入っていく。

そういう世界に入るためには、パウロがひっくり返されたように、もの凄い或るひとつの、その人らしい現象を通すかもしれません。それは、その一人一人によって、突破するときの現象面はさまざまですから。

「あの人はあんな現象で入っていた。そうでなければならぬ」

なんていうようなことは一つもありません。知らないまに入る人もあります。何か知らんけれども、この世界に入ってしまったと。パウロみたいに、ひっくり返されて入るやつもある。いろいろですから、どうか、そういうことに決してこだわらないでください。

●無銭旅行

ナザレの親しい人は、肉において親しい人たちがみんな、この霊の世界の突破をイエスのごとくやっていないものだから、完全に蹟^{あと}いてしまった。

蹟^{あと}きの話で今日はおしまいになつてもいいけれども、ちよつと先の方に行きましょう。

斯^{かく}て村々を歴^へ巡^{めぐ}りて教え給う。7 また十二弟子を召し、二人ずつ遣^{つか}しはじめ、

穢^{けが}れし霊を制する權威を与え、8 かつ旅のために、杖一つの他は、何をも持

たず、糧^{かて}も囊^{ふくろ}も帯の中に銭をも持たず、9 ただ草鞋^{わらじ}ばかりをはきて、二つの

下衣^{したぎ}をも著^きざることを命じ給えり。10 斯^{かく}て言いたもう『何処^{いずこ}にても人の家に

入らば、その地を去るまで其処^{そこ}に留^{とど}まれ。11 何地^{いずち}にても汝^{なんぢ}らを受けず、汝ら

に聴^きかずば、其処^{あかし}を出づるとき、証^{あかし}のために足の裏の塵を払え』

イエスという方はおもしろいことを仰しやる。実際、こういうように文字通り実行したのはアッシジのフランシスですよ。まあ、フランシスでなくても、それに近い人は幾人もいます。日本でも、我々の今の世界にも、これ式にやってのけたご連中もあります。



「それは時代錯誤だ」

と言って、一概にけなすわけにいかない。その方々の精神はつかまえては。

無銭旅行です。無銭旅行がどのようにしてなされたか、私は詳しいことは知らないけれども、しかし、本当に無銭で祈って旅をして、そして苦しんでいる人、悩んでいる人の友となつて、それに祈りをもつて助けたり、托鉢僧式に食物をいただいて歩いたり。とにかく、そういったギリギリの現実をやることを――何も掟おきてにすることはないけれども――ある時、のつぴきならずそういうようなことをしたという人たちがあります。私は或る意味において、敬意を表します。とにかく、ギリギリの棄身の態勢をもつて、物を持つていがまいが、在り方がそういった棄身の態勢で、私たちがこの福音というものにぶつかっていないならば、それは本当の力には来ない。いつも、銀行を心配しているような生き方をしていたのでは、これはダメです。

要するに、ペテロも言ったように、

「金銀は我になし。されど、我にあるもの、即ちイエス・キリストの名により

て、汝、立て」

と言つたら、跛者あしなえが立つた。金持ちであるとか、貧乏であるとかということを持ただ相対的に問題にしているのではない。或る人は、大いに有つていい。大いにそれを神のために善用することのためにいただいている。そのことは、パウロがまた別なところで言っている通りです。

「そういうようにすることを神は喜び給う」

と書いてある。

問題は、それを私するかしないかということだけです。結局、みなすべて無私の角度です。無私、無有です。

「それでは共産主義か」

と。共産主義になることはないけれども。とにかく、私有にして公有ということは、結局、それは根本的には神有である。それはすべて神の有もです。神のものとして自覚し、一切のことは、為すことがすべて、それは献げである。献げられたる在り方というところに神さまは無限に助け、またその御業をそこに現したもう。これが伝道の――何も伝道者に限らず――我々キリスト者の生活の根本精神である。

どうも、私なんかは参考書や何かを持って歩いているのはいけませんけれども、あんなものは一つも要らない。聖書一卷でいい。「聖書一卷の旅」といつか書いたことがある。聖書一卷あれば、どこへ行つても、これを本当に証する。それはただ

「ここに聖書があります」

ではいかなですよ。聖書をいつも携えて、聖書の文字が全部、化体かたいしていれば、これはもう何もいらん。聖書もいらん。



新約聖書を全部暗記してごらんさいよ、できたら。暗記力のいい人がたくさんいるから、やったらいい。ルターが、

「ローマ書は、これをそらんじてなお読み過ぎるということはない書簡である」

と、ローマ書序文で言っているとおりです。ヨハネ伝にしろ、マルコ伝にしろ、とにかく、どこか一つ、頭から何も全部暗記しなくてもいいけれども、暗記するほどまでよく知ってごらんさいよ。もうそれだけで伝道できますから。頭ではないですよ、全存在です。

とにかく、皆さん、やってみなければダメだよ。一人でも、二人でも、本当にこれを伝えなければ。私ばかりが伝道者でも何でもない。皆さん一人びとりが伝道者なんです。だから、私は今日は「伝道」と題した。自分でとにかく、やってみなくてもは。

「そうですか」

ではダメなんだ。福音の世界は決して「そうですか」の世界ではない。身につけなくてはいいかん。すべて身につけなくては。聖書だって、手に持っていただけではダメだ。私も聖書を持っているけれども、これは身につけているから、持ったってさしかえななくても、身につけていなければ、持ったってダメですよ。

信仰の世界はすべて「身につけている」ことだけが本当に働く。借り物はダメなんです。キリストはそういう無一物であった。有るものはただ主の御霊とその御言だけ、その御力だというわけです。御霊には力があるから。それは人を救い上げる力なんで、ぶつ倒す力ではない。救いあげる力です。

●自分をキリストの懷の中に投げ捨てる

10 斯て言いたもう『何処^{いずこ}にても人の家に入らば、その地を去るまで其処^{そこ}に留まれ。

これは伝道の秘訣なんだね。或る家へ行つて、そこで何日も滞在する。嫌がるのを、滞在することはいいですよ。

「どうぞ、いらつしゃい」

というところに滞在する。そして、そこでもって何回も集会をして、とにかく、幾人かの魂にこの躰きの突破をさせなくては。この躰きの突破ができて、こここのところに本当に火が燃えたら、霊灯が燃えたら、それから先へ進んでいく。ところが、私なんかはそれをやっていないので申し訳ない。ダメなんです。それだけやらなくてはいけない。二晩くらいではダメですよ、一週間位は行かなくては。少なくとも三晩は行つて、そこでひっくり返さなくては。せっかく、みんなは話には驚嘆し、驚いて喜ぶんだけれども、

「さあ、皆さん、祈りましょう。どうぞ、お祈りください。『主よ!』『父よ!』

と叫ぶだけで祈りですよ。ちつとも難しいことはない。祈りの最後はもうただその一言ですよ」



と言っているのに、祈ってくれない。

あなた方も、私が

「自由に祈ってください」

と言うときに、あまりよく祈らない。ダメだよ、それは。どしどし祈らなくては。この世界に入るのに、何を考えているか。父の前に――詩篇139篇にあるとおり――神さまの前に、キリストの前に何を体裁つくっているか。飛び込まなくては。飛び込んだ者が本当のこの光の世界に入るんですから。自分をキリストの懷の中に投げ捨てることです。それが祈りですから。そうしたらもう、俄然、灯^{とも}つてしまう。灯らざらんと欲すといえども能わずというわけです。全存在をもつて

「父よ!」

と呼んだら、その瞬間に入る。まだ何かこっち側に置いていて、入らないようなことではダメです。十字架されていれば、この懷の中に入ってしまう。

だから、私は「梵我一如」なんていう言葉は好きなんだ。仏教の素晴らしい言葉も福音の世界で掴めるから。人間は、この世界に入るまでは、我々の魂は本当の安きを、本当の喜びを得ないようにできいるんだ。誰でもそういうようにできている。なぜ、この素晴らしい世界に入ろうとしないか。一番大事なものを、

「それだけはいりません」

なんてやっている。これが根本的な躓きなんです。

●伝道は大失敗

キリストは、按手をもつて弟子たちに靈的な力を与えて、そして伝道をさせた。けれども、彼らのはちょうど蓄電池みたいなもので、その時はいいですよ、なかなかよく光る。よく御言を伝え、悪鬼を追い出して、また病を癒した。けれども、またダメになる。これはキリストが十字架に架かって聖靈が来るまでは、どれでもダメなんだ。イエスはそのことはよく知ってらっしゃる。けれども、

「やがて、私から伝わる靈がこういうことであるかを、お前たちが自ら身に体する
ときがくる。」

と。その予行演習みたいな具合に、キリストはここでなさったわけです。

これで行こうなんて、キリストは思っていらいらない。最後は、伝道は全失敗だと。全部、失敗。キリストの伝道は大失敗です。大失敗で、彼自身が十字架に架かって、誰もついて来ない。この大失敗を通して、キリストは大成功にいくんです。それが即ち、十字架という極限を通して、今度は聖靈が臨んできたから、失われたと思ったものが、今度は、使徒たちを通してぐんぐん伸びはじめ。これはみな御靈の力です。

御靈の力なくして、どうして、パウロがあんな伝道ができたか。それほどまで明々白々た



る事実でありながら、そういう角度から有機体的に健全に御霊のことを語っているのに、どこがおかしいか。東京中の人たちが何と言おうとも、この福音から一步も退くわけにいかない。気の毒ですよ、「聖霊派」なんて言うが。「派」でも何でもありはしない。私は、十字架と聖霊と復活は絶対に離さないものを言っているんだ。いわゆる「聖霊派」というものがあるかも知れませんが、それとは違う。

その時には、皆さんを通して、病める者も癒されるということもあるでしょうし、芸術の世界が展開するということもあるでしょうし、事業も、学問も、それは自由自在です。自由自在に神さまはなさるので、なんら

「これでなければ福音でない」
ということとはひとつもない。

●第二の躓きの石を突破

11 何^{いずち}地にても汝らを受けず、汝らに聴かずば、其^{あかし}処を出づるとき、証^{あかし}のため
に足の裏の塵を払え¹²ここに弟子たち出で往きて、悔^く改^いむべきことを宣^{のべ}伝え、
13 多くの悪鬼を逐^おいだし、多くの病める者に油をぬりて医^いせり。

これは、油をぬって医したんだけど、本当の油は聖霊のことです。そのことは実はまだ弟子たちはできない。それをなつたのは福音書のキリストだけです。また、使徒行伝でもって初めて、パウロやペテロが立たされた。このパウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、これらを通して本当に福音が展開しはじめた。

伝道において、始めは聖書の研究でも何でもいいです、観念信仰でも何でもいいですから、大きく入れて――ユダヤ人にはユダヤ人、パリサイ人^{びと}にはパリサイ人のごとく、みなそれぞれです――なにも

「お前たちはいかん」

なんて言うことはない。ただ、

「それでは、どうかもうひと先へ進んでください」

と言って、その先の躓きの第二の石を突破させていく。これをしなければ、伝道の本当の目的は達しない。第一の躓きをやつと乗り越えたくらいのクリスチャンが幾人いまして、悪くはないけれども、本当の神の国は、第二の躓きの石を突破しなければダメです。

かくして、皆さんの伝道が、身をもつてする伝道が、そういうような自覚をもつて進んでいたいただきたい。そうすれば、これはどんなことがあっても、神の国はじりじりと本当に広がっていきます。もうどういふことにぶつかっても、その人は決して後退することのない人になる。この御霊の内住したクリスチャンになればね。そこなんです。それでは今日はそこまで。

